遊びを通して子どもの育ちを考える(2)

ぼくたちの水迷路を作ろう

阿部　康子

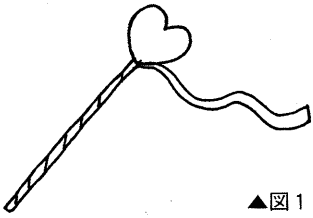
六月七日（木）

「おはよう！」とたつまとたかゆきが保育室へ飛び込んできた。八時三十分、一番乗りである。「せんせい、まだだれもおらん？」「そうよ、たつま君、たかゆき君が一番！」と応じる保育者に、それぞれが「ふ～ん」と言いながら出席ノートをかばんから出し、本日のシールを貼る。貼り終えると「せんせい、自転車に行ってきまあす」と園庭へ駆けて行った。

たつまはお気に入りの黒いハンドルと荷台つきの自転車を出し、得意気に走りだした。たかゆきもつ

い最近までつけて乗っていた補助輪を外して乗れるようになったのが嬉しい様子で、たつまの後に続いた。二人は自転車で園庭を走りながら、こうきやたつや、ゆうすけたちの登園を待っているようである。しばらくするとこうき、たつやが登園し、自転車隊に加わる。四人は一列につかず離れずの距離を保ちながら園庭を回る。見ていると、互いに大声を掛け合いながら走っている。何を言い合っているのかと近付いて見ると、「十回、十一回、十二回」と走り回る回数を数えている。

三十回を超えた頃、ゆうすけが登園した。「ゆうすけ、自転車」とこうきが声を掛ける。「うん、すぐ行く」とゆうすけは答えて保育室へ向かった。しばらくしてゆうすけも自転車隊に加わり、仲間入りとなる。「せんせい、来て」とさとこに呼ばれて、かなり賑やかになった保育室に戻る。「せんせい、リボン頂戴」「どんなのがいいの?」「どんなのでもいいけど」「何に使うの?」「お誕生ごっこに使うから」と、広告紙を巻いて作った棒の先につけるリボンと言う（図1）。「じゃ、この箱の中からどうぞ」とリボンの箱を渡すと、さとこはピンクのリボンを選び、切る。あすかもななこもあやかも「わたしも」とリボン屋さんは忙しくなった。



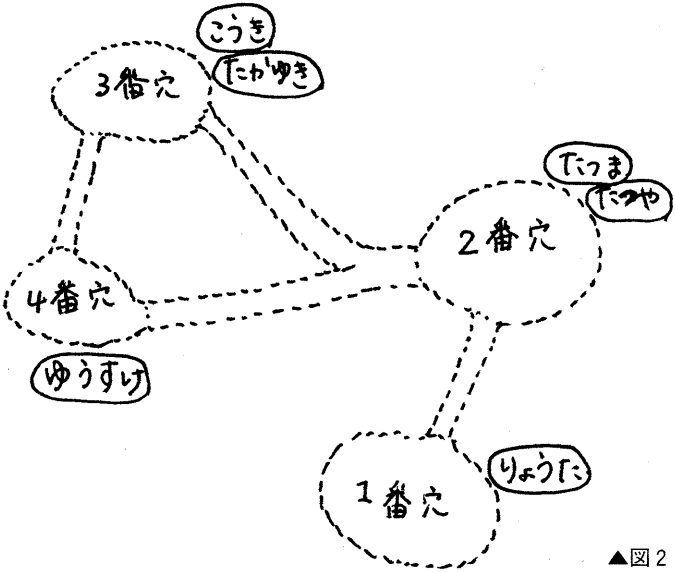
▲図1

その時、自転車隊のこうき、たつまたちが廊下越しに「せんせい、裸足になっていい?」と大声で私に言う。「いいよ、怪我しないように気をつけてね」「うん、分かっとる」とこうきは裸足になり砂場へ走っていく。「僕も」「僕も」とこうきに続く。「何が始まるのかな?」と声を掛けると、ゆうすけが「水迷路作るの」と言う。「水迷路か、難しい

よ」と言うと、「この前たかゆきとゆうきとで作ったことあるもん」と砂場へ走っていった。

子どもたちが砂場へ入ったのを見届けて、再び棒にハートやお花、リボン付けのお手伝いに戻る。忙しさに紛れて、水迷路のことは気になりながら砂場へ行くチャンスを失っていた。と、「せんせい、来て」と興奮した面持ちでたつまが私を呼びに来た。「どうしたの？」と急いで砂場へ行くと、直径八メートルはある砂場一杯に幾つか穴が掘られ、それぞれの穴を繋げるよう水路らしき物が掘られている（図2）。

「へえ、すごいね、こうちゃんとたかくんの穴は高い場所なんだね」というと「そう、僕たちのは三番穴だよ」「じゃ、たつまくんとたっちゃんのは？」「二番穴」「へえ、番号がついてんだ。りょうちゃんのは？」「一番穴」「ゆうすけ君は？」「四番穴だよ」「一番始めはどこから水が流れるの？」と感心



▲図2

していると、こうきが「たつま、ゆうすけ、水を流すぞ！　せんせいも見とってよ」と、こうきは③の穴へ水をバケツでザアーッと入れる。

水は実に美しい流れを作り出して④、②の穴へと流れていく。そして①の穴へと流れていく。③の穴の位置が他の穴よりやや高いことで、水の流れにスピードが加わり、美しさをより強調しているのであろう。子どもたちは何回も③の穴に水を流し込み、水が穴からあふれて二本の水路を流れ落ちていく様子に「スゲエー」と感動している。そのうち水は④と②でほとんど吸い込まれて、①の穴へたどり着くまでに水量が減って勢いがなくなる。

調子が悪いことにりょうたが気付き、「なんで僕とこへ来んの？　たつまのとこが邪魔しとる」と怒りだす。保育者は「どうして来ないかな、水が少ないかな」と、りょうたと二人でたつま、たつやの穴と水路の様子を見る。りょうたの水路はやや浅い上に、上から砂が流れ込んでいることもあって水が流れ込みにくくなっている。

「りょうちゃんとこの水路をもう少し掘ってみようよ」と一緒に掘る。水路は低くなり、②の穴から水が流れ込んできた。嬉しくなったりょうたは水をどんどん②の穴へ流し込もうとする。こうき、たかゆき、たつまたちが、「水は俺たちの穴（③の穴）しか入れてはいかん」と抗議しだし、水路の間を歩き回るので、水路が崩れ始めてしまった。すでに砂場全体が水でグチャグチャになり始めている。私は「どうしようか、せっかくうまくいっていた水迷路だったのに…」という思いを込めて、「困ったねえ、穴も崩れそうになってきたよ」と六人の顔を見つめた。

しばらくして、たつまが「穴堀り競争しよう」と言い出した。①の穴か②の穴か③か④かと互いに深さを競い合うことになった。「オレたちの方がぜっ

たい深い！」とこうき、たかゆき組が言えば、たつま、たつや組は「オレたちの方が深いに！」。一人で掘っているりょうたとゆうすけはもくもくと掘る。

穴を掘るのに一応の満足をした六人は、穴の深さを比べようということになり、調べる方法は先生が穴の中へ入ってみることになった。私は①から順に入る。「せんせい深いら」「うん深いね。よく掘れたね」。②の穴も入ってみる。「ワア怖い！」「どっちが深い？」「同じ位かな？」と言いながら③に入る。この時、こうきの期待に満ちた表情にぶつかり、「こうちゃんの穴もスゴイね」と驚くと、「一番深いら」と言う。「そうかなー、深いね」とあいまいに言葉を濁しながら④の穴へと進む。

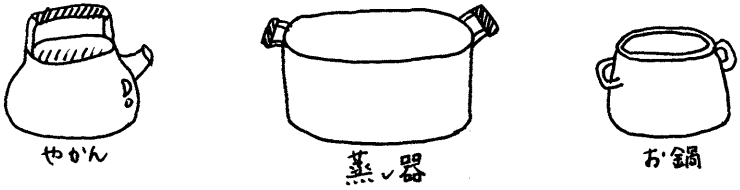
ゆうすけは「ぼくのとこは、熱くなった足を冷やすとこだもんで、深くしとらん」と、深さ比べからはリタイア。「ヘエ、熱くなった足を冷やすところね、それもいい考えね」とゆうすけのアイディアを認めながら話していると、次はそれぞれの穴へ水を入れるという。どの穴が一番早くいっぱいになるか、である。

こうき、たかゆき組はやかんがいいか、お鍋がいいかでもめたあげくやかんになる。

たつま、たつや組はこれが一番、と大きな蒸し器を探してきた（図3）。

りょうたがお鍋となって水運びである。

お鍋組、やかん組、蒸し



▲図3

▲お鍋組、やかん組、蒸し器組の水運びが始まった

▲砂場は次第に賑やかになっていく

器組がお互いの速さを気にしながらの水運びが始まった。蒸し器組のたつまが「これ重いわ」と音を上げる。たつやが見にきて「半分にした方がいいわ」と量を減らし、二人でさげて運ぶ。やかん組のこうきは運ぶ回数も多いが、素早い。砂場は次第に賑やかになっていく。砂場の動きは次第に活気づき、ゆうき、わたる、てつや、ことむも仲間入りして一段と賑やかさを増していった。

ふと気がつくとゆうすけが裸足で砂場にいる。ゆうすけは年中組の四月に転園してきて以来、一度も素足で園庭に出たことがなかった。保育者が「気持ちいいよ、裸足になってみようよ」と誘っても頑として裸足になれなかった。今日は何と裸足で、夢中で砂を掘り、水を流しているではないか。「よかった！」と思いながら「ゆうすけ君、裸足気持ちいいね」と声を掛けると、「うん、僕裸足初めて、でも気持ちいい！」と答えてくれた。

保育者が思ったこと

ア　自転車に乗って何回も走り合い、互いに声を掛け合ううち、水迷路作りへと気持ちが動いていったこと。

イ　③の穴を高い位置に作り、水が流れ下りていくことを予測して水路や穴を掘っていったこと、水を実際に③の穴へ流し、その水がそれぞれの水路を通過して穴から穴へと流れる様子を六人が息を凝らして見つめ、やったあー！と感激をともに味わったこと。

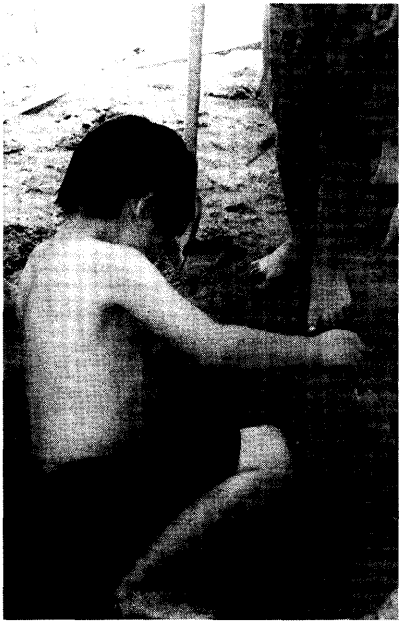
ウ　水を流すことで砂場に作った水迷路が崩れ始めると、次の目標「穴をもっと深く掘ろう」「穴へ水を入れよう、どの穴が早いか」が生まれ、再び夢中になっていったこと。

エ　遊びに夢中になってゆうすけが自分でも気が付かないうちに裸足になっていた、そしてゆうすけ自

身「きもちいいー」と思ったこと。

オ　今までこうした遊びに参加してこなかったゆうき、てつや、わたる、ことむが「穴に水を入れよう」の段階ではあったが、初めて仲間入りできたこと。

などが大きな収穫であり、保育者にとっても嬉しい日であった。



▲「穴はどこまで掘れるか」と、子どもたちは砂場を掘り始めた

七月に入ってのこと、「穴はどこまで掘れるか」と、子どもたちは砂場を掘り始め、ついに底のコンクリートにスコップがカチンとぶつかってびっくり！

砂場のことは何でも知りたい子どもたちである。

（愛知双葉幼稚園）